

民俗競技としての「綱引」と「相撲」について

瀬戸口 照 夫

はじめに

旧八月十五日の夜は、通称「仲秋の名月」で一般的に知られているが、とりわけ南九州においては、その夜実修される行事のなかで、「綱引」と「相撲」が顕著である。綱引終了後、その綱を土俵作りに利用し、子供や青年が「相撲」を取る。これが一般的な十五夜情景である。ところが、必ずしも綱引終了後に相撲が付随しているとは言えない調査結果がある。昭和29年から20年近くかけて、南九州の事例調査をされた小野重朗氏の事例集を集計してみると、綱引事例約226集落に対し、その綱引に付随して相撲を実修している例は約110前後である。¹⁾ 約5割のパーセントで、相撲が付随しているのである。また、筆者が調査した鹿児島県薩摩郡甕島の場合には、15集落の綱引実修に対して、8例が相撲を付随していた。これも約5割のパーセントである。この5割をどうみるか問題ではあるが、少なくとも同時に実修され始めたのではないと言える。何故なら、旧八月十五夜に相撲だけを実修する事例は、筆者が小野氏事例集や甕島調査から得た資料からだけだと1例に過ぎなかったからである。したがって、本稿は、両競技の性格や十五夜との関連及び相撲が何故綱引に付随したかを究明することにある。

I 十五夜について

旧八月十五夜は、月見、名月と称して全国にゆきわたっている。もちろん、今日旧暦に統一されて慣行されているわけではないが、少なくとも民俗色豊かな行事を伴う場合は、旧暦で行われている場合が多い。「都市では、名月が古来詩歌、俳句の好題とされてきたこともよく知られている。こうした名月鑑賞の風は、すでに中国の唐代に知られているから、それが日本の上流階級の間に模倣され、しだいに民間に沈下したものと考えてよいであろう。月見団子をつくり、芒の穂を供えることは都市とその周辺の例で、地方にはやや意外な民俗が十五夜と結びついている。」²⁾と解説されているが、むしろ、この意外な民俗が南九州に限って言えば多く存在し、その民俗こそ十五夜の本質をなすもののように思える。

十五夜は、農耕儀礼として重要な意味をもち、また、それに先立つ八朔の行事との関連からして、稲作儀礼としての穂掛け行事的性格を持って定着している場合もある。³⁾ けれども、「十五夜行事を整理してみると、稲作に関するものより畑作に関する儀礼の比重はるかに大きい。」⁴⁾という指摘もある。畑作の中でも里芋を中心とした行事の分布が東海から西日本に点在していることが根拠となっている。

十五夜に実修される諸行事が、稲作にかかわるか、畑作にかかわるかは、それぞれの地域の収穫暦と関係するものであるし、あるいは、どのような作物を栽培しているかによって差異は生じ

るのである。品種改良以前の稲の収穫時期が、東北と南九州では違うことは容易に理解できるし、気候の差異によって、栽培植物が違うのも当然といえ当然である。そのような色々の要素が、十五夜行事の内容の差異を生起せしめているのである。

以下、十五夜行事の諸特徴が指摘されているので記することにする。⁵⁾

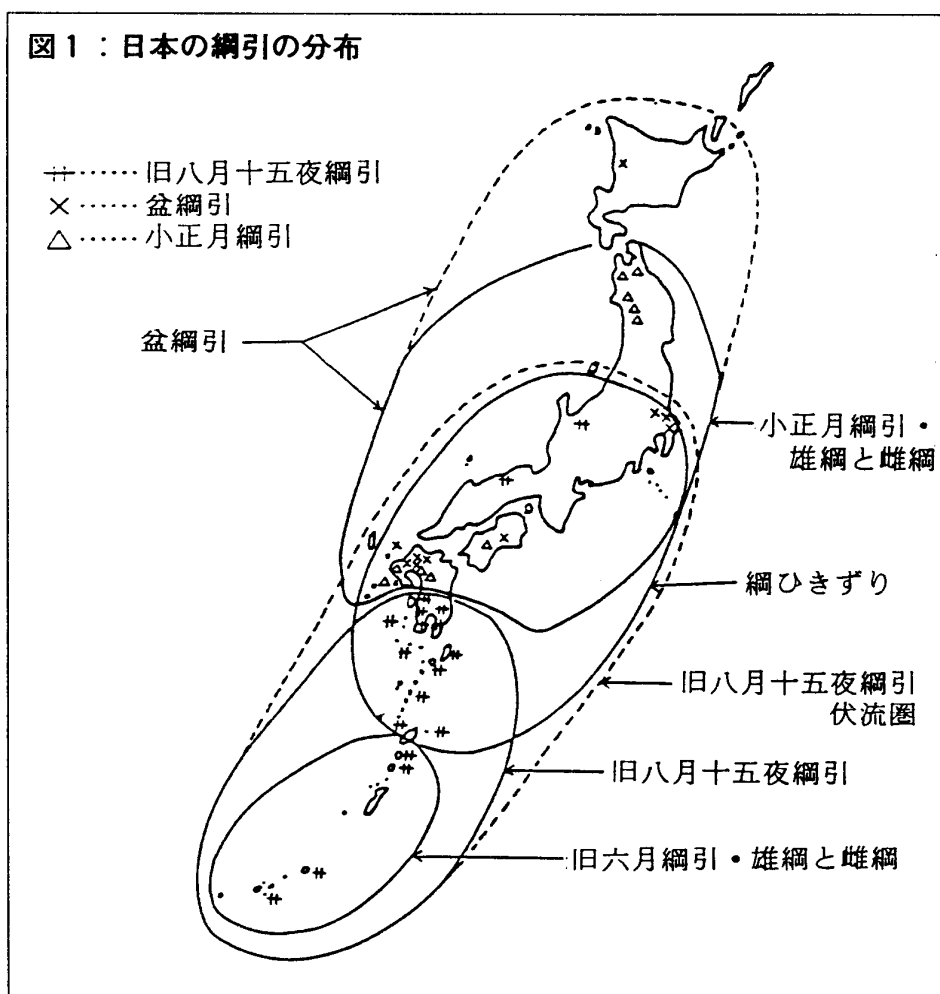
- (1) 里芋その他の芋類や山野の採り物を供える。
- (2) 新穀や焼米を供え穂掛けをする。
- (3) この夜藁苞で地面を打つ。
- (4) 綱引を行う。
- (5) 相撲を取る。
- (6) 蓑笠をつけた訪問者が来る。
- (7) 河童が海と山とを往来する日。
- (8) 子供組、若者組の行事としての集団性が強い。
- (9) 供物に対する社会的禁忌が存在する。
- (10) 供物を盗む。
- (11) 火祭が行われる。
- (12) 年占的性格を持つ。

このような十五夜行事の特徴からすれば、収穫祭的性格は充分読み取れる。収穫祭という意味からすれば、中国伝来の天文学にもとづく文字暦観念は、むしろあとから付随したもので、それぞれの土地や風土にあった民間知識としての生産暦にそって、それぞれの農産物の収穫時に催される祭として存在したものが、文字暦の流布によって、それに繰り込まれたと見ることもできる。したがって、十五夜の行事の多様化が理解できるのである。

Ⅱ 綱引の民俗性

わが国における綱引は、学校行事として、あるいは町内会等の体育祭、運動会等で必ずといってよいほど実修される人気種目である。このような綱引とは別に、毎年一定時期に、それも単に勝負を決するだけではなく、さまざまな古い要素を付随し、勝負に対しても勝ち負けだけではなく特別な意味付けをして実修している綱引もある。このような綱引習俗は、全国的に点在しているが、期日的には、正月（小正月）、六月、盆、旧八月十五夜に括ることができる。正月綱引は、中部九州から東北にかけて点在し、六月綱引は奄美大島諸島や沖縄諸島のプーリやウマチーといわれる豊年祭や収穫祭に行われる。また、盆綱引もかなりの地域で行われていることが指摘されている。⁶⁾(図1)

ところで、わが国の民俗色豊かな綱引の構成要素について、寒川氏が秋田県仙地郡刈和野町の浮島神社での旧正月の大綱引を引き合いに出して、日本の綱引の指標となる五大要素を抽出している。⁷⁾



下野敏見著「東シナ海文化圏の民俗」より

二抱えもある本綱に無数の引き綱を枝のようにない込み、人々はこれにとりつき「ジョーヤサイ」の掛け声によって引き合う。

刈和野でも綱は、上町と下町によって雄綱と雌綱の二本が用意される。雌綱の先端は沖縄のように輪に造るが、雄綱は頭部を少し太くさせただけである。結合は、雌綱の輪に雄綱の頭部を挿入し、さらに、雌綱にそわせるように雄綱をからませる。引き合えば引き合うほど、二本の綱は結び合う仕掛けである。そして上町が勝てば米は豊作、下町が勝てば米の値が上がると占う。

江戸時代の末にこの地を訪れた菅江真澄（1759～1829）の『月の出羽路』に、この綱引のより古い形がみえている。それによると、綱引は市神と浮島明神とに関わる儀式で、祭りは次のように進んだ。

正月十五日に長山金四郎家に斎奉される本神（陰陽二柱の木形）が沐浴させられ、化粧と称して米の粉がふりかけられて町に担ぎ出される。綱引の場となる二日町と五日町の間に立つ制札の前に市神は移され、そこで改めて儀礼を受ける。日も落ちたころ、東の二日町の雄綱と西の五日町の雌綱が結び合わされ、綱引となる。負け方は不作と占う。引き終わると、綱はいったん、市神を勧請した制札の垣根にトグロ巻きにする。しかし二月一日に浮島明神の神垣に移し懸け、四月八日の浮島祭祀の折に、前を流れる水尺川に流す。俗に、浮島明神は両頭の大蛇

と伝え、雌雄綱もこの大蛇になぞったものという。——中略——陰陽の市神と雌雄綱によって性が、市神の沐浴と綱の水尺川投棄によって水が、そして綱を浮島明神の本体とみることで蛇が表象され、全体が新年の稲の豊穰予祝にむけて収斂されている。

少々長い引用ではあったが、日本の綱引を特徴付ける五大要素（正月・豊穰・蛇・性・水）から構成されているという事情による。日本各地の綱引が、この五大要素を全て具えているとは限らない。このことは、この五つの構成要素からなる綱引がより古態であり、伝播によってそれぞれの要素が欠落していったのか、あるいは、最初からワンセットとして構成されていたものでなく、ある時期に各々の要素が付け加わって、それぞれの綱引習俗を成立させてきたという二通りの考え方が成立する。

このような考え方を基本として、南九州の綱引、特に甑島の綱引に限定して観察すると、ほとんどの集落が五大要素を全て具えているとは思えない。このことは、いくつかの文化波を受けて、それぞれの集落で取捨選択され独自の定着の仕方をしたと考えられる。(表1)

例えば、下甑村瀬々之浦の事例であるが、この集落の綱引は、旧八月十五夜である。旧の八月十五夜を新年と対比してみると、一般的な暦観念からいくと、その違いは歴然としているかのようである。小野氏によれば、「一月一日（古くは二月）が冬を終え春（夏）を迎える季節の大切な祭であると同様に、八月のはじめの日は夏を送り冬（秋）を迎える季節の祭であったと思われる。南島の正月は八月だったというのではなく、日本列島全体に一月と八月と少なくとも二度の正月的な節祭があり、東北日本から本州一体では冬を送る正月の方に中心がおかれるようになり、南の島では夏を送る八月の節に中心がおかれることになり、中間の九州では南九州を中心に正月を重視しながら八月を大切に行事が多く見られるようになったのではないか。」⁸⁾という指摘からも類推できるように、一月一日の正月に対応する八月を大切に行事として綱引が行われていたのである。

瀬々之浦の現在の人口は、360人前後で、世帯数は約190戸である。下甑村全体の人口が、昭和20年の約4分の1に減少していることから、この集落の人口も例外ではない。

従来、この集落の綱引は、子供組と青年組（二才中）から成り、子供組は、ソウダンジュウ（相談中）といわれる13歳から16歳までの集団で、その下に12歳以下の子供集団もあった。綱引は、相談中が中心になって、その綱材料の収集から製作まで行う。旧八月五日の「小月夜」になると相談中は浜に集まり、12、13日まで相撲の稽古をし、12、13日に「平山」と称する山に葛を採りに行き、その夜はその山に野宿する。14日の朝、山から葛を背負って浜に行き、上組、下組と分けて葛を積み上げ、その夜はその葛の上に泊まる。15日の朝から相談中は、二才中（ニセジュウ）の手を借り、また、12歳以下の子供たちを手伝わせて綱製作を行うのである。綱は、葛が主で、採ってきた葛を合わせ練って三本の大綱を作り、その三本をまた合わせ練って親綱を作る。この親綱につける引き綱を兼ねる枝綱は、稲藁で製作される。いよいよ綱引の時間になると住民総出が半ば義務付けられ、もし出て来ない場合は、石がその民家に投げ込まれたりすることもあったという。

表 I 甌島列島の綱引

構成要素	内 容	記号
綱 引 実 修 日	旧八月十五日	A
綱 製 作 日	旧八月十五日 旧八月十四日 旧八月十三日	B C D
綱 材 料 収 集 日	旧八月十五日 旧八月十四日 旧八月十三日 そ の 他	E F G ◎
綱 材 料	植物の蔓だけ 稲藁だけ 蔓 + 稲藁 そ の 他	H I J K
対 抗 組	男女対抗 2 地区対抗 色々な対抗	L M N
綱 の 処 理	綱を切断 海に流す 分 配 入 札	O P Q ◎
綱 の 象 徴 性	綱蛇体観	R
綱 の 形 状	一 本 綱 2本を結んで1本綱に 枝 綱 (有)	S T U
相撲の付随(有・無)		
変 装 の 有 無		

	村 名	地 区 名	綱 引 実 修 日	綱 製 作 日	綱 材 料 収 集 日	綱 材 料	綱 引 対 抗 組	綱 の 処 理	綱 の 象 徴 性	綱 の 形 状	相 撲 の 付 随	変 装 の 有 無
上 甌 島	里 村		A	B D	◎	J	M	Q	R	T	有	有
		中 飯	A	B	E	K	L N		R	T S U	有	有
	上 飯 村	江 石	A	B	G	H	M	Q		T	有	
		瀬 上	A	C	F	H	L N	O	R	S	有	有
		桑 之 浦	A	C	◎	H	L	P		S	有	有
	中 飯 島	平 良	A	C	◎	H	L M		R	S U		有
		鹿 島 村	蘭 牟 田	A	B	F	H	M N	◎	S U		
	下 甌 島	村	手 打 (麓)	A	B C	◎	J	N	Q		有	
			手 打 (在)	A	B C	E ◎	I	L M	Q		T	有
			手 打 (浜)	A	B	F G	K	N	Q		S	
			片 野 浦	A	B	F	I	N			S U	
			内 川 内	A	B	E	I	N			S	
			青 瀬	A	B	G	K	M			S U	
			長 浜	A	B	F	H	M	◎		S	
			瀬 々 野 浦	A	B	G ◎	H	L M	O	R	S U	有

綱引競技は、男女対抗や地区対抗で行われ、男女対抗においては、常に女性側が勝利を得ていた。そして、相談中のなかには、マサカリモチという綱を切る役割を担った者がいて綱引最中にその綱を切り、そしてまたつないで引き合うことを繰り返すのである。この綱引が終了すると相撲が始められるのである。⁹⁾

瀬々之浦の十五夜の綱引の意義を考えると、年齢階梯制が明瞭なこと、また全員参加ということから「社会統合」の機能をも指摘できる。日本の綱引の五大要素と比較してみると、男女対抗が示すように性的対立、そして女性勝利は女性の能力である出産から類推し得る豊穰の要素が抽出できる。また、綱の切断は蛇の退治行為として理解できるし、このことは綱自体を「蛇」に見立てる観念が希薄になり、その伝承が存在しなくなったのであろう。このように考えてくると、瀬々之浦の綱引には、性、豊穰、蛇、新年（八月節祭）の四つの要素は抽出できる。だが、水に関する要素が欠落しているけれども、綱引終了後の「相撲」が「水」にかかわることは次項で述べることにする。

瀬々之浦の綱引には、蛇観念が希薄であったが、今日まで綱自体を蛇の化身としてその伝承を保持している門之浦の事例を呈示してみたい。鹿児島県川辺郡知覧町の門之浦は、半農半漁をその生業形態としていた。現在の戸数は110戸弱で、高齢化は例外ではない。この綱の特徴は、以前は材料に小麦の茎を使用していたこと、直径が50・60センチ、長さが40メートルぐらいで、綱の端を蛇の頭に見立てて太く作り、もう一方を蛇の尾のごとく細く作ることである。(写真1・2)そして、最も他の綱引と違う点は、通常は綱の中心から左右に引き合うのであるが、「門之浦の横引つ」といわれるように、蛇のように作られた綱全体に枝（引き）綱をつけ、陸側から子供と女性が枝綱を取って引き、海側から二才衆が幹綱を直接抱えて引き合うという点である。(写真3)横引きのため、幹綱がくねくねとW字型を形作るので、あたかも蛇が蛇行するかのような。したがって、勝負の見極めは困難であるが、面積によって一応は決着をつけるという。最後は、その綱を円形に回して、その中で相撲を取るのである。(写真4)以前は、2段3段に重ねてその中で相撲を取っていた。「綱蛇体観」を顕著に示す事例である。

Ⅲ 相撲の民俗性

わが国における「すもう」の始まりを起すのに、必ず登場する記事は、建御名方神と建御雷神の「力競べ」の記事から始まり、次に当麻蹶速と野見宿禰の「搦力」が続く。「記・紀」にあらわされている記述である。さらに、「相撲」の文字の初見は、「日本書記」の雄略天皇十三年九月の条に登場する。概略はこうである。木工技術者真根は、台座に石を置いてその上で、木をけずり、決して斧の刃をこぼすことはない。そこで天皇がその手許をくるわすため、給仕役の「采女」に禰だけ付けさせ、相撲を取らせ、真根の手許をくるわせて、刃を傷つけさせるところとなるのである。かなり、エロチックな情景であるが、相撲が裸体に禰だけを付け取り組むことの初見でもあり、神事性が欠落していることも注目に値する。

ところで、「相撲」という文字を最初から「すもう」と称していたのではなく、「すまひ」「すま

ふ」といわれていたのである。「すまひ」「すまふ」は、さからう・あらそうの意味に使用され、また、その「すまひ」が音便化して「すもう」になったと解されている。¹⁰⁾

また、この「すまひ」は「相舞」であり、目に見えぬ精霊を相手に相撲を取る「一人相撲」を事例として、「舞」と解し、それが互いに手を取りあって相対して舞うようになったものが「相舞」であるという。そして、この相舞は宗教的意味合いの強い芸能に由来するものであると解く。¹¹⁾

一方、競技性が強調され、その勝負によって、「豊・凶」「幸・不幸」がもたらされるという古い信仰を日本人は保持していたし、この信仰的性格をもつ相舞が結合してわが国の相撲を発展させてきたと解されている。

ところで、先の当麻蹶速と野見宿禰の「搦力」は、垂仁天皇七年七月七日であり、節会相撲も天平六年（734年）七月七日に行われたことになっている。七月七日は七夕であり、七月十五日の盆行事の一環としての性格をもち、水浴の日としたり、降雨を期待する伝承もあり、さらに、河童に供養する日とか、水神祭の日とかの伝承もある。河童が人間に相撲をいどむ伝承は数多くあり、水の精霊と人間との対戦を「一人相撲」にみたてたりする解釈もある。いずれにしても相撲と水との関連はこれで理解できる。

鹿児島県日置郡金峰町高橋では、八月二十二日「ラッカブイ」「十八度踊り」と称する祭礼がある。この祭礼は、水難防止・火災防止を今では祈願して行われている。その祭礼のなかに、「子ガラッパ相撲」と称する子供たちの相撲がある。ここでの「ガラッパ相撲」は三人抜き、五人抜きを意味していて、河童との相撲で河童が負けると次々にいどんでくる各地の伝承と合致しているかのようである。

さらに、今日の「大相撲」においても水との関係は明白である。力士が土俵に登場すると必ず水を口に含んでうがいをするのがこれを「水をつける」といい、力士が水をつけるので「力水」という。この「力水」は「塩」と同様に体を清めるという意味と「水盃」の意味があるとされている。また、勝負がつかず一定時間経過すると「水入り」となり、力士は水を使い一息入れてから再び勝負を開始する。

土俵上の吊り屋根の下部に協会紋章の入った紫紺色の布を「水引幕」と称し、水との関連を示すものである。さらに、四股名に川や海の文字を使った力士が多いことも水との関係を否定できないものといえよう。

ところで、わが国には「大相撲」「アマチュア相撲」とは違った趣を持つ相撲が数多く存在する。それは「祭礼」ともなっており、「祭」の一環として実修される相撲であり、「神事相撲」として括ることができる。神事であるから単に力量の優劣を決するだけではなく、さまざまな意味づけがなされている。そこらあたりの事情を折口は、当麻蹶速、野見宿禰の例を引き合いに出して、「恒例の神事ではおそらく勝負が決していて、比程の場合には至らないであろうが、時としては番狂わせに、いろいろ突発的なこともあり、又特別の目的をまじえた場合には、かうした激しい勝負になったこともあるのであろう。だが、毎年農村行事として周期的に行う場合は、習慣どおり勝ち方の者が勝ち、負け方の者は負けるので、演劇としての色が強くなった。所が、真に神意をト

ふ必要に緊張して来た際とか、又競技的な気分が群集の間に広がった場合は、かうした本格勝負にもなるのであらう。併し要するに毎年秋期田の行事として初秋におこなったものである。』¹²⁾と述べている。

初秋の田の行事としての神事相撲は、収穫祭の一環として実修されていたことになる。収穫祭は、三段階に区分できる。第一に穂掛けの儀で、西日本では八朔に稲の穂出しを祈願する行事がある。第二に、刈り上げの儀、第三は、稲扱き終了後の扱上げ祝いである。この収穫祭の期間に実修される神事相撲は、筆者が調査した全国87の事例からいえば、約8割強になる。したがって、十五夜も畑作の収穫祭的色彩が強いことは明白ではあるが、稲作の収穫祭と混在し、その一要素だけを取り入れたと思われる。

主として、稲ワラで作られる綱を土俵として、相撲を取るということは、明らかに稲作文化との関連を示すものである。綱を土俵にするという考えは、「相撲史」のなかに土俵が登場した後、それが流布した結果であらうか？16世紀後半に土俵が登場したことを「相撲史」は教えているが、それ以前は、土俵というものは存在せず、「人方屋」といって、円陣の人垣を作ってその中で相撲を取っていたのである。その後、四本柱を立て、柱と柱を四角に仕切って相撲場としたのである。円形土俵が登場するのは四角土俵後である。また、昭和六年四月から円形の一重土俵になるけれども、それ以前は、二重に土俵をつくっていた時代もあったのである。俵に土を入れ、それを何俵も使って円形を形作るのが土俵で、一本綱を円形に形作るのではない。してみると、綱引用の綱を円形にする行為と土俵とのかかわりは、職業相撲文化の他方への伝播によるものか、あるいは、元々十五夜に綱を円形にする習俗が存在していたわけであるから、円形土俵が流布する以前から、綱の輪の中で相撲を取っていたという二通りの考え方ができる。

しかしながら、十五夜に実修される相撲が、綱引に使用された綱を利用して相撲場とするとは限らない。すなわち、円形に形作るには綱自体がある程度の柔軟性を持ってなければならず、葛だけの綱だと円形を作るのには不都合であるし、また、たとえ形作ったとしても、かなりの危険性がある。したがって、土俵は別に設置して、綱引終了後相撲を取ったとも考えられる。(写真5)

Ⅳ おわりに

南九州における旧八月十五夜の綱引と相撲は、農耕儀礼的性格を保有して定着しているけれども、前述したとおり、両競技が同時に実修し始められたわけではなく、別々に十五夜に付随していったと思われる。十五夜が畑作の収穫祭的性格が強いことは指摘されているけれども、稲ワラで綱を製作するということは、稲作との関係を示すものである。けれども、綱製作に稲ワラを使用しない事例もあり、稲ワラ綱がその原型といえるのかどうか疑問でもある。甑島の事例でいうと、約5割が葛だけの綱で、残りは複合綱が大半で、稲ワラだけの綱製作は3集落にすぎない。このことは、甑島の農耕形態ともかかわるけれども、広い水田地帯を抱えているわけでもなく、大半が「棚田」に象徴されるように、豊富な稲ワラを提供できるほどの水田に恵まれていないこととも符合する。してみると、少なくとも甑島の十五夜綱引は、葛綱による綱引が最初に定着し、そ

の後、稲ワラを使用するようになったという考えが成立する。農耕形態からいって、その逆はどうも考えにくい。しかしながら、この考えが南九州全体にいえるかどうかは検討の余地はある。

相撲が稲作とかかわることは、その民俗性からいって明確であるけれども、十五夜と何故結び付いたかという点、畑作文化と稲作文化が融合したからであると思われる。畑作収穫祭としての十五夜に「儀礼競技」としての綱引が定着し、その後、稲作儀礼的性格を持って相撲が入り込んだのである。したがって、定着している集落とそうでない集落が存在することが証左となろう。

また、綱による円形土俵は、少なくとも「人方屋」から「土俵」に移り変わった後、それが流布して、南九州に定着したという考えと、前述のとおり、綱を円形にする習俗は、十五夜にはあったわけであり、「相撲史」が教える「土俵」登場以前から円形土俵があったとみる二通りの考えが成立する。

〔引用・参考文献〕

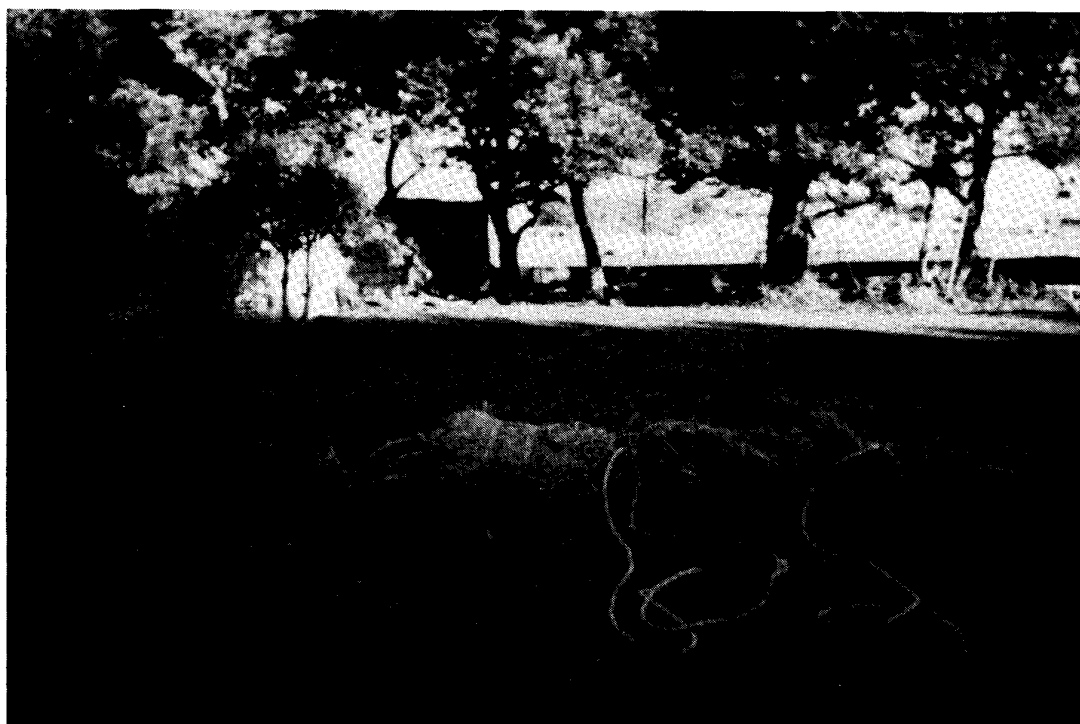
- 1) 小野重朗『十五夜綱引の研究』慶友社、1972年。
- 2) 直江広治『日本民俗事典』「十五夜」弘文堂、1972年、p.335。
- 3) 郷田洋文『日本民俗学大系7』「年中行事の地域性と社会性」平凡社、1976年、p.173。
- 4) 3)のp.174。
- 5) 3)のpp.175～176。
- 6) 下野敏見『東シナ海文化圏の民俗』未来社、1989年、p.175。
- 7) 寒川恒夫「綱引のコスモロジー」『月刊百科8』平凡社、1990年、p.17。
- 8) 1)のp.188。
- 9) 拙稿「エスニックスポーツとその伝承母体」『体育の科学7』杏林書院、1990年、pp.543～544。
- 10) 酒井忠正『日本相撲史上』ベースボールマガジン社、1956年、p.4。
- 11) 和歌森太郎『相撲今むかし』河出書房新書、1973年、p.12。
- 12) 折口信夫『折口信夫全集17巻』中央公論社、1973年、p.31。

(平成2年9月17日受理)

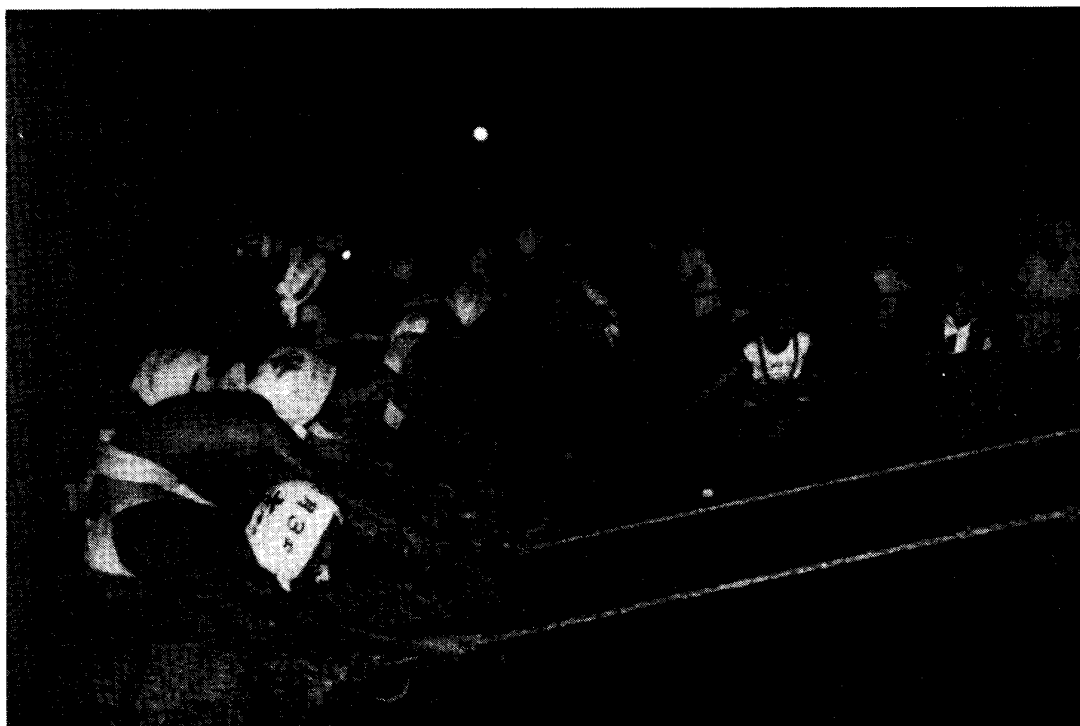
(写真1)



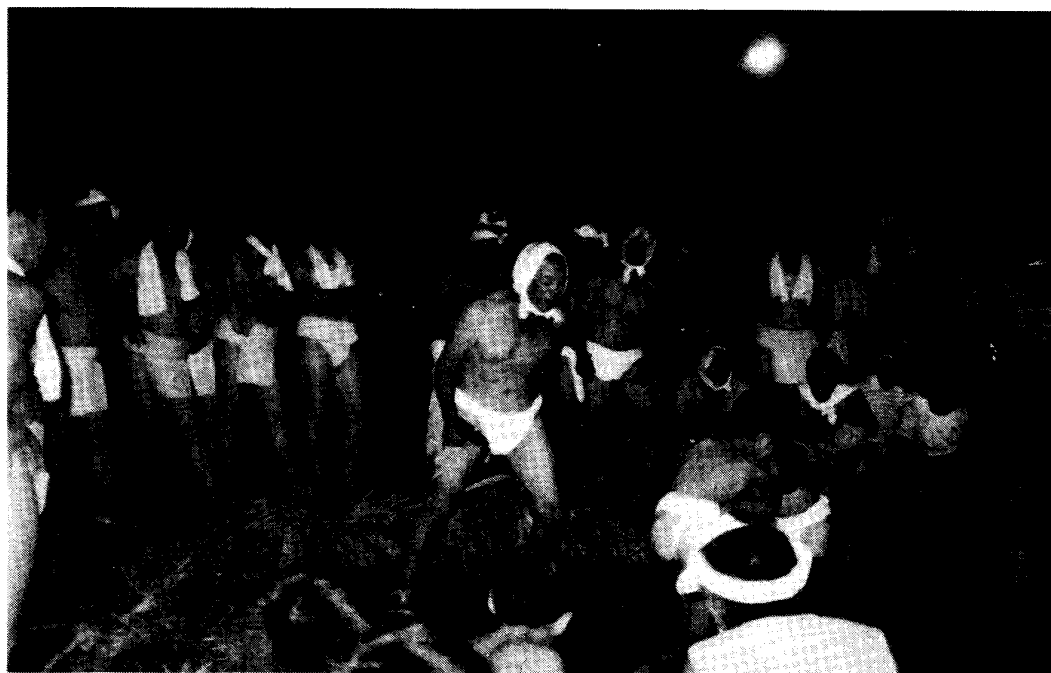
(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(上飯村江石の十五夜相撲場)